

ロシア

上野 俊彦

ロシア政治の研究を始めるまで

私は、もともと、中高の社会科教員になるつもりで、一九七四年四月に慶應義塾大学法学部政治学科に入学した。しかし、結局のところ中高の教職には就かず、ロシア政治を研究することになった。ロシア政治を研究することになったきっかけは、ロシア語を学んだことと、恩師・中澤精次郎教授の講義を聴いたことである。

ロシア語を学ぶことにした理由は、世界史の教員になろうとしていた私にとつて、欧州近現代史の中で最も興味深く思えたのがロシア革命であり、どうせ英語以外のヨーロッパの言語を学ぶのなら、ロシア語が自分の勉強に役に立つのではないかと思つたからである。当時の大学は二つの外国語をそれぞれ週二回二年間履修するのが普通だった。しかし私は一年次から第二外国語としての週二回の必修ロシア語のほかに、さらに週一回、選択ロシア語を履修した。つまり、ロシア語だけで、週四回学ぶことにしたのである。週二回の必修ロシア語は、一年次が文法、二年次が講読を中心とする授業だったが、それだけでは飽き足らず、会話の授業を履修したのだ。しかし、会話と言ってもネイティブ教員はいなかったため、テープレコーダーをガチャガチャ動かしてネイティブの発音を聞きはするが、ほとんどの時間は日本人教員とやりとりする授業であつた。日吉の二年間、大学生活の中心はロシア語の勉強だった。

法学部は二年次からゼミがあつた。私は、ロシア・ソ連政治のゼミをとつた。ロシア語を勉強していたからということもあるが、ゼミを担当する中澤精次郎教授の講義が、ジャーナリスティックなソ連論とは一線を画す、きわめてアカデミックなことに感銘を受けたからでもある。講義は、正直なところ、当時の私には難しすぎて十分に理解できなかったと言えなかつたが、学問とはこういうものだ、ということだけは理解できた。ゼミは教授が指導する本ゼミのほかに、自分たちで日本語や外国語の文献を輪読する自主ゼミがあり、三年次になると四年生や院生の指導するサブゼミが始まり、勉強の中心はゼミとなった。とはいえ三年次になつても週四回のペースでロシア語の授業を続けていた。一つは法学部の必修科目である原書講読で、私はロシア語の原書講読を選択していた。さらに二年次までの必修ロシア語の延長で、選択科目としての上級ロシア語講読が週一回あり、週二回のロシア語会話も続けていた。とくに原書講読の授業は予習が大変で、前日はいつも徹夜だった。学生は二人しかおらず、必ずあてられるからだ。つまり、勉強の中心はゼミとロシア語だった。

私は教職科目を履修して教員免許を取得したものの、中高の社会科教員にはならず、一九七八年三月に学部を卒業すると、慶應義塾大学大学院法学研究科に進み、修士課程では主として一九〇五年頃から一九二〇年頃までのロシアの労働組合・工場委員会運動について研究し、一九八〇年四月に進学した博士課程では、第二次世界大戦後の現代ソ連政治について研究した。研究の方法は、法令集や議事録、同時代のロシアの法学者の国内政治についての著書や論文をひたすら読むというものだった。

当時は、学部の学生が留学することはまれだったが、研究者を目指す大学院生が海外の大学院等に留学することは珍しくなかつた。しかし、ロシア語・ロシア文学やロシア・ソ連の歴史・政治・経済などを研究している大学院生がソ連に留学することはきわめてまれだった。一九五六年の日ソ国交正常化後、ソ連末期まで、ごく短い一時期を除いて、一般の大学院生がソ連に留学する制度がなかったからである。もちろん短期間の観光旅行は可能だったが、現在と違ってとても費用がかかり、一週間モスクワに行くことさえ、普通の学生には高嶺の花であった。

大学院博士課程を終えた私は、一九八六年四月、国家公務員研究職として防衛庁（当時）防衛研究所に就職した。防衛研究所での私の仕事は、基本的には、ロシア語の文献を読み、ソ連政治についての論文や報告書を書くという、

博士課程でやっていたことの延長であった。しかし、ソ連では一九八五年にソ連共産党書記長となったゴルバチョフがペレストロイカを開始、研究は日に日に忙しくなっていた。私にとって、ロシア・ソ連は、まだ見たこともない、肌で感じたこともない、文献を通じてのみ知っている研究対象であった。

在ソ連日本大使館への赴任

私が初めてロシアに足を踏み入れたのは一九九〇年三月二十九日、三十六歳のときのことである。一九八八年の年初に在ソ連日本大使館への赴任の内示が出てから、二年近く待たされたあげく、発令をあきらめかけていた一九九〇年三月一日、突然、一か月以内にソ連に向けて出発せよとの辞令が出たのである。内示が出た頃はまだ生まれていなかった娘があとひと月あまりで二歳になるうとしていたときである。当時、在ソ連日本大使館には陸海空の防衛駐在官がいたが、防衛庁の文官のポストはなかった。それゆえ、私の赴任は防衛庁から一名の増員となるわけで、内示が出てもなかなか発令に至らなかったのは、他省庁とのあいだの調整がつかなかったからではないかと私は推測している。在ソ連日本大使館には、大蔵省、通商産業省、科学技術庁（以上、名称はいずれも当時）、農林水産省、水産庁、警察庁などからの出向者が各一名おり、すでに三名いる防衛庁がなぜ一名増員するのかと、問題視されたのかも知れない。ともかく一九九〇年三月二十九日、私は在ソ連日本大使館員として家族とともにモスクワに赴任することになった。

一九九〇年当時のソ連は、ペレストロイカのもとで進められていた改革が頓挫しかかっており、日本ではソ連経済の混乱や物不足が報じられていた。そうした状況では、子どもの紙おむつなどの入手も困難と思われたため、コンテナ便で送った引越越し荷物とは別に、当座すぐ必要なものは飛行機で一箱に持っていかなければならないと考え、チェックインした荷物には、乳母車や数週間分の紙おむつ、電気釜や一週間分ほどのコメまであった。しかし、実際にモスクワに着いてみて分かったことは、物不足なのは固定価格の国営商店だけで、自由価格の市場には生鮮食料品があふれており、紙おむつもミネラルウォーターもコメも容易に手に入れることができる、ということであった。モスクワで最初に知ったことは、日本のソ連報道がまったく当てにならないということであった。

モスクワのシエレメチエヴォ国際空港に到着したのは三月二十九日夕刻のことだった。研修上がりの若い館員がロシア人運転手が運転する官用車で迎えに来てくれ、自宅となるリガ駅近くのアパートまで送ってくれた。車窓から初めて見るモスクワの夕景は、家々の明かりが蛍光灯ではなく電球であったために赤っぽく見え、懐かしささえ感じるものだった。

翌日の初出勤は近くに住む館員が車で迎えに来てくれたが、帰宅は地下鉄を利用して一人で帰ることにした。大使館の最寄り駅は「レーニン図書館」である。ロシア語を勉強し始めてから一六年、モスクワの地図はおおむね頭の中に入っている。迷わずに駅まで着いた。当時のモスクワの地下鉄は窓口でジェットン（地下鉄専用コイン）を買い、それを自動改札機に投入する方式だった。ロシア語で「ジェットンを一枚下さい」と言い、おつりを受け取って、改札機を通る。通勤ラッシュの中、長いエスカレーターで地下ホームに降り、ホームの天井から下がる案内板を見て目指す電車の来る側がホームの右か左かを確認する。電車に乗り、乗換駅のアナウンスがあったところで電車を降り、案内標識に従って、階段を登り通路を通って別の路線のホームに出て、再び天井から下がる案内板を見て自宅最寄りの駅に向かう電車が入線する側を確認する。電車に乗って、「次はリガ駅」のアナウンスを聞き、電車を降り、エスカレーターで地上に出る。自宅のアパートまではすぐだ。自分が一六年間勉強してきたロシア語は、間違っていないかった、というあたりまえのことが確認できて私はうれしかった。ロシア語を学び始めて一六年間、見ることでできなかったソ連に、行くことのできなかったモスクワに、私はいま立っている。そんな単純なことがうれしかった。

私がモスクワに赴任する直前の一九九〇年三月一日にはソ連を構成する共和国の一つであるリトアニア共和国が、赴任の翌日の三月三〇日にはエストニア共和国が、そして五月四日にはラトヴィア共和国が、それぞれソ連からの独立を宣言している。六月二日にはロシア人民代議員大会がロシア共和国の憲法・法律がソ連憲法・ソ連法に優先するとした主権宣言を採択している。七月二日から開催されたソ連共産党第二八回大会は中央集権制から「党の連邦制

化」へと大きく舵を切った。当時、まだ誰も予測してはいなかったが、いま思えば、ソ連は確実に解体の方向へと向かって進み始めていた。私は、大使館政務班でソ連の内政動向を日々忙しく追いかけているが、ゴルバチョフと共産党の権威が失墜していくのを感じていた。

市民はインフレに悩まされていた。流通も麻痺し始めていた。土日のクレムリン前の広場は市民の政治集会であふれていた。そんな中でも、モスクワでの初めての外国生活は楽しかった。五月のメーデーの頃になるといっせいに花が咲き始め、夏になれば白樺の森が心地よかった。冬になると、娘はソリ滑りで大はしゃぎだった。ロシア人は優しかった。地下鉄の車内では、幼い子どもを連れた私たちに必ず席を譲ってくれた。公園で娘を遊ばせていると、お節介なおばあさんが娘に必ずチョココレートやキャンディーをくれた。警官さえ、指しゃぶりの癖が抜けない娘に、汚いから指をしゃぶってはダメと身振り手振りを交えて優しく声を掛けてきた。「百聞は一見に如かず」とは、ロシアのためにある言葉のようだ。一九世紀ロシアの外交官にして詩人のチュッチェフは、「ロシアは頭では分らない」と言った。文献を通して知ったロシア・ソ連も決して間違っていないが、実際に見て感じたロシアは、おおらかで温かく優しく、そして人間的だった。

一九九二年二月末、私は、ロシア連邦と名を改めた国から帰国した。ロシアにとっても、私にとっても、激動の二年間であり、生涯で最も長い二年間であった。

研究の立脚点

外国の政治を研究する者として心がけるべきことの一つは、研究の立脚点、ある種の普遍性のある軸のようなものを持つことである。こうした軸を持つことで、研究対象を相対化し、客観視することが可能となる。私の場合、この軸に相当するものは、「立憲主義」である。立憲主義とは、憲法は公権力の担い手の専横から国民を守るためにある、とする考え方である。この立憲主義を軸としてロシア政治を見たとき、ロシア政治には、多くの問題があることがわかる。しかし、多くの問題を抱えているのはロシアだけではない。もちろん日本の政治にも多くの問題がある。

外国の政治を研究する者として心がけるべきことのもう一つは、内在的研究に努めるということである。言い換えれば、相手の立場に立つてものを考えるということである。外側から見て批判することは容易だが、なぜそのような問題が生ずるのかということを考えるためには、いったん将棋盤をぐるりと一八〇度回転させて相手の立場に立つて盤面を見るような作業が必要である。そのためには、研究対象の地域の言語、文化、歴史についての深い知識が必要となる。

私にとって、研究対象としてのロシアは、「立憲主義」という軸から、いわば離れたところから冷めた目で客観視しているものであるが、他方で、私にとって、二年間を過ごしたロシアは、いとおしく懐かしい。

(外国語学部ロシア語学科教授)